

桶川市協働推進提案事業

べに花と桶川宿の物語

べに花と桶川宿の物語

べに花畑で

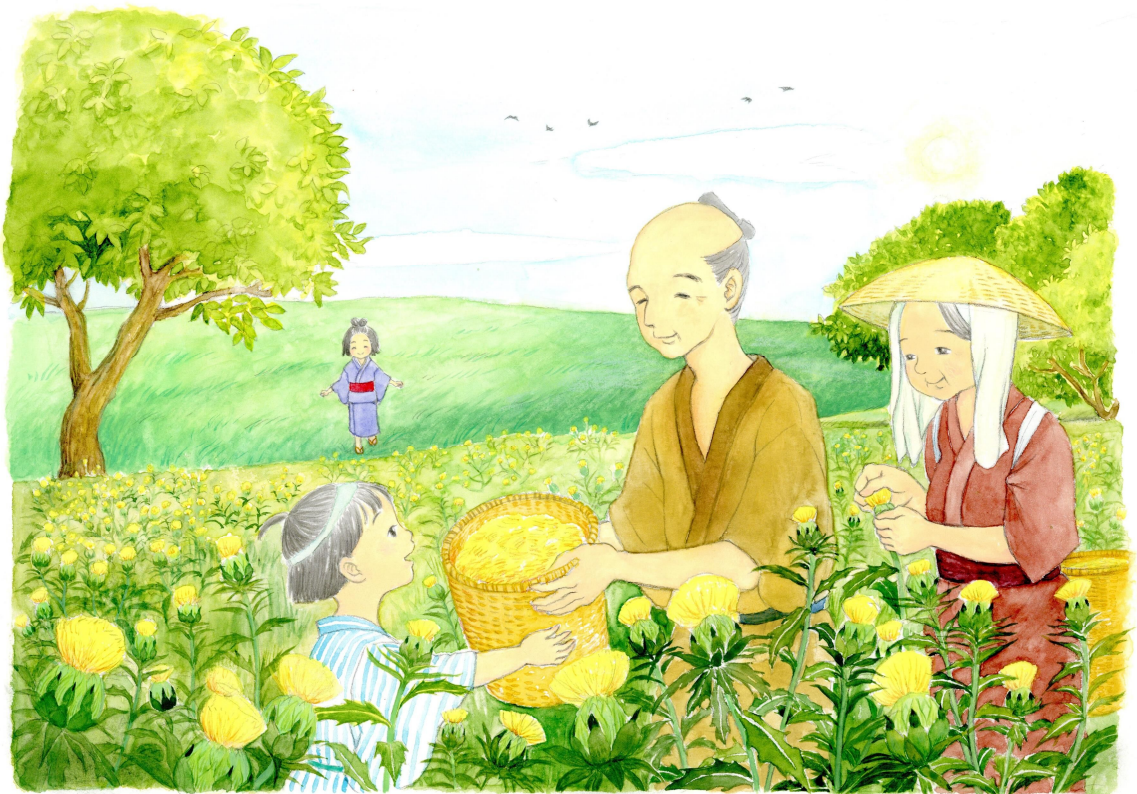
桶川の夏は、黄色いべに花の開花とともに始まります。梅雨^{つゆ}あけを前に、雑木林^{ぞうきばやし}の緑は濃くなり、ゆたかに実った麦もかり入れをまっています。

—五月がくればいそがしや 庭には麦がやまほど—

このころ、村の農家も、中山道桶川宿の商人もとてもいそがしくなります。

お父さんやお母さん、兄さんたちは、麦のかり取りや脱穀^{だっこく}にと力強くはたらいしています。

子どもたちも早起きして、おじいさんやおばあさんといっしょに、家の近くの畑にむかいます。朝つゆにしめったべに花の花が、かわかないうちにとつみとるのです。



「おーい太郎^{たろう}。」

花が入ったかごを受け取りに、子どもたちのせたけよりも高いべに花のくきの間をす

りぬけて、太郎は走ります。べに花の葉には、とげがあり、太郎のうでや顔をちくちくとさします。

花びらが入ったかごをおじいさんからうけとると、太郎は、また、べに花のくきをすりぬけて、畑の外へ出て、妹のサキをよびます。

「サキ、大事なべに花だよ、しっかりもって、転ぶなよ。」

小さなサキは、かごをしっかりとかかえ、小川に向かい、かごを水につけました。

日がのぼり、あせばむころ、花びらをつむことをやめ、みんなは、すずしい風のとおり小川のほとりに集まって一休み。

おばあさんは、家からもってきたふかしたサツマイモをくばります。サツマイモを食べ終わると、おじいさんが、太郎の顔を見ていいました。

「さあ、お日さまが高くなってきた。家にもどってべにもちをつくろうか。」

べにもちつくり

家では、麦畑から先にご帰ってきたお姉さんとお母さんが庭にむしろをしいています。

納屋の中には、きのうつみ取った黄色いべに花が真っ赤に色づいています。

おじいさんは太郎に手つだわせて、うすの中にべに花を入れ、きねでつき始めました。
つきあがると、おじいさんは一休み。

お母さんは、ついてねばりけが出たうすの中の花びらをまとめ、お正月のおそなえもちのように丸めます。

「いい色だね、太郎。」

お母さんが丸めたべに花を、太郎はお姉さんにわたしました。

赤い大きなべに花のかたまりをお母さんとお姉さんはちぎっておだんごのように丸め、むしろの上にならべていきます。

仕事をしながら、お姉さんが歌い、お母さんはこれに合わせてはやします。

「はーよー お江戸で流行るべにしぼり あれほしやのー 麦うつあの子のたすきに」

「はー どっこい どっこい。」



なれば終わると、この上にぬのをしき、その上にむしろをかぶせます。

「太郎、サキ、さあ仕事だよ。」

お母さんがよぶと、太郎とサキはむしろの上に乗ってふみ、べに花のおだんごをつぶしていきます。

お姉さんとお母さんが、そっとむしろとぬのをはがすと、おせんべいのようになったべに花がむしろの上にならんでいます。これを日ざしにあててかわかすと「べにもち」のできあがりです。ぬのを赤くそめるには、このべにもちがかかせないのです。

「ごめんください。^{ぬのや にしぞう}布屋の西藏です。」

桶川宿の布屋さんは、べにもちを買い集めるのが仕事です。おじいさんにむかって声をかけます。

「今年のべに花のできはどうですか。今年も、麦といっしょに布屋に買わせてください。」

おじいさんは、

「いいできだよ。」

とできあがったべにもちを見せてわらっています。

布屋庄左衛門（ぬのや しょうざえもん）さんの店先

桶川宿の布屋さんの店先に、京（京都）の吉文字屋^{きちもんじや}の幸助^{こうすけ}さんがやってきました。

吉文字屋さんは、べに花を日本中から買いあつめ、そめ物屋さんたちに売る大きなお店です。

「今年もしばらくお世話になります。」

幸助さんは、京に送るべに花を買いにきたのです。



さっそく、庄左衛門さんが、べに花のねだんをたずねます。

「だいぶ、べに花のねだんがあがっているようですが、京ではこまっていませんか。」

「そうなんです。去年が60両、ことしは70両近いねだんです。」

「べに花を作ってくれる桶川の人たちにとってよいかもしれませんが、そめ物屋さんはこまっていますよ。」

「ところで、庄左衛門さん。京では、宮様が江戸のしょうぐん様におよめ入りとするという話でもちきりです。」

「うわさには聞いていましたが、いよいよですか。こちらは、麦とべに花の仕事で大いそがしです。幸助さんもよろしくおねがいしますよ。」

—麦のしまつは祇園^{ぎおん}まで—

7月になると、庄左衛門さんの店には、つぎつぎと麦のたわらが運びこまれ、にぎやかです。

店の中では、農家をまわって「べにもち」を買ってきた布屋の西藏^{にしざう}さんと、これを京に送る吉文字屋の幸助さんがいっしょにべにもちの品定めをしています。

「今年は、天気がよかったせいか、よいべにもちができました。見てくださいよ、幸助さん。」

「これなら、布屋のべに花として、京でもよろこばれるでしょうね。」

「さあ、もうひとがんばりしましょう。祇園祭^{ぎおんまつり}に間に合うように。」

祇園祭（ぎおんまつり）

7月14日の朝。中山道にある「市神様」の前に、のぼりばたがかかけられました。

上町（^{かみまち}相生会）、上中町（^{あいういかい}本街保存会）、下中町（^{かみなかまち}栄会）、下町（^{ほんまちほんぞんかい}八雲会）のおみこしが市神様の前にあつまります。桶川宿のみんなが元気でいられるように、そして町がゆたかになるように、人びとのねがいを受けて、文久元年（1861）の桶川祇園祭が始まりました。

町の会所（^{かいしょ}）の前では、町内のみんながおみこしを待っています。子どもたちも大ぜい集まってきました。

たいこをのせた車を先頭に、おみこしがやってきました。

おみこしが会所におさめられると、みんながよろこびの声をあげました。おはやしもはじまり、町中がにぎやかになります。

おはやしをえんそうしているのは、麦やべに花の収穫（^{しゅうかく}）で一生けん命はたらいた村のわか者たちです。

人形をのせた大きな山車（^{だし}）は、祭りの前に、町の大工さんたちが組み立てたものです。会所の中には、羽織（^{はおり}）を着たお年よりが、祭りをまとめています。町の祭りに、たくさんの人たちがきょう力します。

大きなおみこしのとなりには、子どもたちのための小さな手づくりのおみこしがおかれています。

お年よりがこどもたちに声をかけます。

「さあ、昼ごはんまでの間、町内をまわっておいで。」

「わっしょい！ わっしょい！」

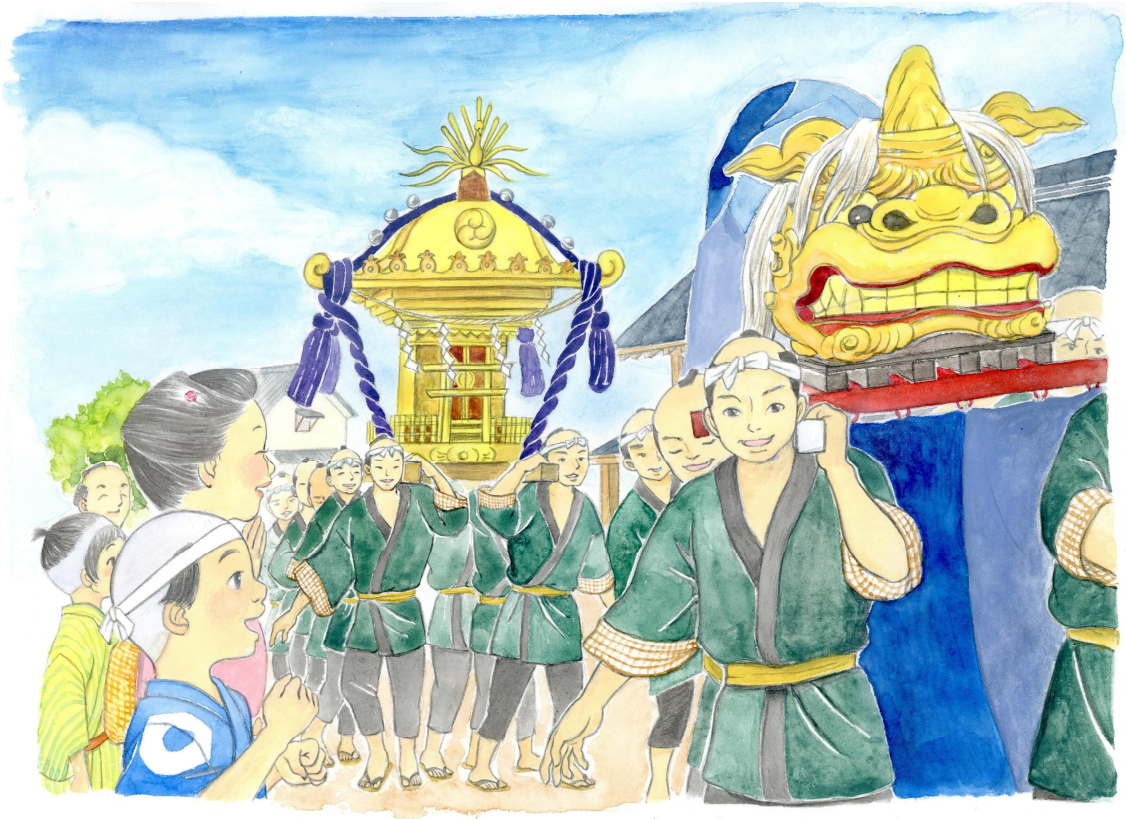
子どもたちはよろこんで小さなおみこしをかつぎ、会所を出て、町内をまわります。

午後、強いひざしの中で、上町の市神様の前に町内のみこしが集まります。

江戸（^{えど}）にもまけないようにとはりきって作った大きな獅子頭（^{ししがしら}）を先頭に、おみこしが中山道をねり歩きます。

麦やべに花の仕事をがんばった人びとのよろこび、そして、おみこしをかつぐわか者

の元気は夏の暑さにもまけないでしょう。



和宮様（かずのみやさま）がやってくる

お祭りの会^{かい}所^{しょ}でべに花を売り買いしている庄^{しょう}左^ざ衛^え門^{もん}さんがおみこしを見送っている
と、桶川宿^{なぬし}の名主^{よしきぶろう}である由三郎さんがやってきました。

「庄^{きちもんじや}左^ざ衛^え門^{もん}さん、京の吉文字屋さんから、和宮様が江^え戸^どに向かうことを聞いていますか。」
「由三郎さん。京ではその話でもちきりだそうです。祭りが終わるといそがしくなりそ
うですね。」

由三郎さんは、うなずきながら、「たいへんなことになるぞ」と決心しているよう
でした。

お祭りが終わったころ、江^{どうちゅうぶぎょう}戸^どの道中奉行から名主の由三郎さんに手紙がとどきま
した。

そこには、こんなことが書いてありました。

桶川宿に和宮様がとまること

和宮様がとまる本陣^{ほんじん}をきれいに整えること

桶川宿に、たくさんの人や馬を集め、江戸まで行列の荷物を運ぶこと

由三郎さんは、さっそく本陣^{じんえもん}の甚右衛門さんをたずね、相談します。

「甚右衛門さん。11月には和宮様が桶川宿本陣にとまることがきまりました。本陣を
きれいに整えなければなりません。どうぞ、よろしくおねがいします。」

わたしは、これから村の人たちと相談して、馬や荷物を運ぶ人たちを集めなければな
りません。どうか、和宮様が安心しておとまりいただけるようにがんばってください。」

「由三郎さん。わたしは、さい近まで江戸で勉強をしていたために、桶川宿の仕事が、
まだまだよくわからないのです。」

「こんどの和宮様の江戸のしょうぐん様へのおよめ入りは、中山道の町にとって、いま
までにない大きな出来事になると、江戸のなかまから聞いています。」

「それは大へんです。桶川宿のみなさんといっしょにがんばりたいと思います。」

秋も深まる10月20日、いよいよ和宮様は京を出発し、江戸へと向かいました。近
づく行列をむかえるじゅんびに由三郎さんは大いそがしです。

なにしろ、和宮様のおともは4,000人にもなったとつたえられています。

夏にべに花や麦を桶川宿に運んでくれたまわりの村に、和宮様の行列の荷物を運ぶ人と馬を出してもらうことは一番たいへんな仕事です。

いつも、桶川宿を助けてくれる村だけでは足りずに、170もの村むらにおねがいしたそうです。こうして、集めた馬の数は1,799頭、人の数は36,450人にもなりました。

ある日、由三郎さんが、本陣の甚右衛門さんのところにやってきました。本陣はとても大きなたて物で、そのじゅんびはたいへんです。

「由三郎さん、どうか、直したたて物を見て下さい。」

甚右衛門さんは、由三郎さんを和宮様がおとまりになる部屋にあん内します。

「甚右衛門さん。これなら、わかいおひめ様もよろこんでくださるでしょう。」

甚右衛門さんは、おふろ場やおやすみなる部屋を作り直し、障子^{しょうじ}のふちも赤くぬりなおしてくれたのです。

「由三郎さん。おおぜいのおとものみなさんがとまる家のじゅんびもたいへんだったでしょうね。」

「そうですよ。町中の家におともがとまるので、桶川宿のみなさんが用意できるものは足りず、近くの町からたくさんかりて間に合わせました。」

11月13日。いよいよ和宮様をむかえる日がやってきました。

由三郎さんは、朝早くから、村むらから集まる人や馬を受け付けています。集合時間は、巳ノ刻（みのこく 午前10時ころ）と決められており、遠い村は夜通し歩いて桶川宿にたどりついたそうです。

和宮様がおとまりになる本陣では、門の前にまくをはり、門には「和宮様おとまり」のふだをかかげました。

お昼をすぎて、未ノ刻（ひつじのこく 午後2時ころ）、桶川宿に行列が入ってきました。和宮様は、きれいな輿^{こし}に乗っています。

おとまりになる本陣の前では、甚右衛門さん、由三郎さんをはじめとする宿場の役人が手をついてむかえる中、輿のとびらが開き、わかく美しい和宮様がおすがたをあらわされました。

本陣に入った和宮様は、江戸に入るさいごの夜をここ桶川宿ですごされ、次の日のま

だ暗い丑ノ刻（うしのこく 午前2時ころ）に、江戸の入口にあたる板橋宿^{いたばしじゅく}へと桶川宿を出発していきました。

桶川宿に集められたたくさんの人や馬もこれにつづき、板橋までおともをしたそうです。

和宮様の大行列が桶川にとまった7年後に江戸時代は終わり、新しい明治時代^{めいじじだい}をむかえました。

〔ことばの意味〕

・名主（なぬし）

江戸時代に村や町をまとめる役わりをもった人。桶川宿では4人が交代でつとめていました。

・本陣（ほんじん）

宿場には、大名や地位^{ちい}の高い役人がとまる大きな屋敷^{やしき}がおかれました。

・道中奉行（どうちゅうぶぎょう）

江戸時代に、東海道や中山道などの主要な道^{しゅうどう}を守り、交通の安全を守るためにおかれた幕府^{ばくふ}の役職です。

